

時報

No. 2

1950. 7

目次

新入部員にむかへ	1
記 八方より殊島槍へ	2
録 槍より燕へ	11
香山に用ひられた計画的ピクニックとしての雪洞	7
香山良産・会計報告	6
1950年度 香山計画	16
24年度ノート	16
兼 会 記 録	17

大阪大學山岳會

新入部員に望む 篠田軍治

一年間の歩みを反省してみると色々といふことがあつた。春、夏、秋、冬の休暇を中心とした山行、平素のトレーニング、集会等にも、もつとばつさりした計画性が望まれるし方一の場合も考へての対策も樹立しておく必要もあるし、その他色々といふことが認められる。

併しそれ等は今年の課題として、こゝには触れないこととして今春新制大学々生を基準として行つた山行について時に感じたことを述べてみよう。

昨年夏の新制大は九月から授業を開始したため、旧制の山行の期間が試験期に當つたので止むべく四月末に新制中心の槍ヶ岳を計画した。この計画に旧制からリーダーを出すかどうかは相違問題があつたところであり、事実入学後、日浅いとは言つても昨秋の白峰や木曾駒、冬の白馬入りと言つても相違トレーニングも行つたつもりではあるし、年齢的にも旧制高専以上であるから何も旧制大からリーダーを出す必要はないとも考へられたのであるが、今年の気

候的な異変、まだ十分に場数を踏んでいないこと等を考慮するとどうしても新制大だけで行かす気になれなかつたので香山から帰つて間のない家田君に行つてもらつたわけであり、この点は自分だけの意見だけでなく皆の一致した賛成であつた。

結果は報告の方に詳しく述べてあるように予定の計画を無事完了したとは言え、多くの検討を要すべき辛柄を残した。これは天候や思いがけない病人が出たことにも致されたのは確かであるが、尚今後の新部員の育成のための重要な反省資料であることには間違いない。技術的面の検討は他日に譲つて、これをもう少し違つた立場から眺めて見よう。戦後派という戦前派の人達からは今どきのアフレゲールはと一口に片附けられてしまふ場合が多く、学校では学力の低下がよく問題になる。併し例へば入学試験の成績などを見ると戦前にもこんなよいクラスがあつたかと感ぜざるやうな場合に尋ぶつかることがある。併し、だからと言つて学力は戦前以上であるとは言つて言つことはいふ所ない。事

実、少し応用的な、十分に内容を消化しきつていなければ解けないうな問題に出会うと直に欠陥を暴露して、戦前に較べて遙かに劣るといふ結果を出すことが多い。こゝろした欠陥が山でも、何か変わったことがあつた場合に現われて来るのではなからうか。今の新制大の部員には極く特殊の人を除いて戦前から山をやつていた人はない。中學校で登山を相嘗やつた後に高度の技術を教へられたといふのではなくて、いきなり、戦前と同じ程度の山行をやらせるために速成的に途中を飛ばして氷雪技術などを教へこまれる款である。言わば氷や雪の上を相違歩けるやうになつてからアイゼンを付け、アイゼン補うのでなく始めてからアイゼンで、アイゼン無しでは全く歩けないのである。だから、最近の中學生が計算能力が著しく不足でも計算器を使つたら一人前であるやうに、アイゼンを付けたら相違歩けるが、そこに何か事故でもあつたら意外な弱点を暴露する危険があるのである。このやうな基礎訓練の子匠の上に先輩の意見を盲信する弊がある。併しその反面著しく懐疑的なこともある。これは何れも垣根を越して行つた経験で、例へば登山の注意、何箇所を教へられてもどれが最も大切であるかの判定する能力に欠けてゐる。

(2)

うに思われる。もつともこれは指導する側の先輩にも大いに責任があるわけで、言つて来た時代の違ふ後輩の立場を十分に認識していないことにも依るであらうが、それを望むのは少し無理である。自分のように科挙の面を絶えず学生に指導に携つていて、相當な年令の用事があつたために、こうした言つて来た時代の違ひをいつも考慮に入れていなければならぬ。指導の者でも、ともするとそれを忘れがちで、指導の方法に適切を欠くことが多いのは自分の至らぬためと云ふ。他人に口絶対にないとは保証し得ないことと思われる。

こうした事情を認識して先ず基礎的な事からしっかりと身につけてもらいたいと思ふ。この

八方より鹿島槍へ

昭和二十五年三月二十七日—四月十三日

三月二十七日

松久(M4)、加藤(S2)、家田(M2)、久保(T2)二十三時十五分の列車にて大阪発

三月二十八日

午後七時細野着。大久保先輩及び徳永(M4)

大阪発。

点は先人の記録を讀む場合も同じである。いつてもまゝに同じ山行が出来るとは限らない。単

に時と天候その他の條件が同じならいつても同じというわけではない。その人の過去の経歴という大きなファクターがあることを忘れてはならない。又、単に一つのルート、一本の道だけはいくら検討しても、それだけでは山行は出来ない。必ずその附近の地形その他の特徴を十分に把握すべきであつて、そうしたなければ肝腎なルートの本質とか特徴を正しく理解することは出来ない。検討は精緻を要することは勿論であるが、山といふ一つの全体をよく見ることを忘れてはならない。

久保三朗

三月二十九日 晴天 オ一回黒菱荷上。

午前中チッキで送つた食糧、テント、サイクル等を四谷へ取りに行く。一番の汽車にて大久保

着。午後以上五名にて黒菱に荷上げ。雪の半は消えたナキ山の登りには全く両口する。ナキ山の上にてスキーを捨てワカンをはく。荷が重いためゆつくり登り黒菱七時十分着。八時登急い

で下り九時十分細野着。高曇りの月明にて月は笠をかぶつて居た。徳永二番の汽車にて着。

三月三十日 雨 オ一回黒菱荷上。

朝より雨。いつでも出られる様用意して待つ中、雨もやんだので四時出発す。やはりスキーを用いず。七時三十分黒菱小屋着。

三月三十一日 曇 下樺荷上。

七時四十分発、九時十五分オ一ケルン、十時四十分オニケルン、十一時まで休憩、十一時三十分オニケルン、十二時三十分下のカンバ着、平川側の斜面に雪洞を極る。三時頃かゝる。荷物全部を入れ、徳永、松久、久保残る。加藤、家田、大久保下る。

四月一日 激雨、強風 滝着。

雪洞では雲、黒菱みぞれ雨、連絡のため家田加藤三時五分黒菱小屋発、四時十分雪洞着。ずいぶんぬれになりものすごく寒い。合議の上久保下る事とす。積雪量一晝夜の間に約一米増加しデポしたスキーが殆んど埋つて居た。四時五分雪洞にて雨風のやんだ中を滑降り五時十分黒菱着。

四月二日 快晴 烈風 滝着。

前半より強風。九時頃に至り風も少しはなまり陽も出て来たので四時九時三十分にて

りの橋を買つて出発。強風が積雪を吹きつけて
顔の痛し中五登る。四名ともスキー、オーケル
ンの附近から、ますます風強く雪面もクラスト
して数度吹き倒され、伏しては風の面をわらい
前進したがオニケルン手前附近にてかなり長い
間待つても風の面なく十一時三十分遂に引返
す。風に吹きおろされる様に下り十二時三十分
登坂。昨日アイゼン、ピツケルを雪洞におい
てきたのは失敗なり。一方雪洞にては今日天気
が穏ければ下るとの昨日の約束により放久十時
雪洞内にてかなりの強風と感じていた
るもそれ程と思わずワカんにピツケルを持つて
下る。クラストの斜面と強風のためピツケルで
確保しつゝ這つて下つたも眼鏡やりユツクサ
イドに入れたるもの等も風にとほされ、自身も
しばしば吹き上げられ甚だ惨憺のあげく二時黒
雲小屋着。二の頂より激次風勢も表へてきた様
なので再び加藤(ワカン)家田(スキー)にて
三時出発。オニケルン附近にて下りまつた徳永
(アイゼンピツケル)に出会う。徳永は五時三
十分黒雲着。加藤、家田はなお前進したるもオ
ニケルン手前の斜面がクラストし加えて強風の
ため登れず約二時間の奮闘の後諦めて引返す。
六時三十分黒雲着。

(3)

六時三十分黒雲着。

四月三日 曇後快晴 善松橋上。

昨日の強風の名残あるも六本において天気は
良くなりそう故七時三十分黒雲着。オニケル
ン附近ではかなり吹かれたが十時三十分雪洞
着。時計が二つしかなくおまけに二つとも狂つ
たり止つたり随時という代物故今後時間記録は
怪しくなる。荷物の持てない分は雪洞に残しス
キーは岳樺にくくりつけておく。十一時三十分
雪洞着。風もやみ高曇りのおだやかな天気の中
と落ち、二時三十分黒雲小屋着。この日黒雲よ
り善松へ往復した三人のパーティー他に一組あ
り、夕方迄居住性の好転に努む。

四月四日 風雪 雨 流瀧

四月五日 晴後豪雨 五龍偵察

八時起床。高度二千五百米の一面の雪海、高
空には巻雲層あり。風もや、強かつたが剣は朝
日を受けて輝き、まず晴天、起床のいさごかお
そいちらみあり、大急ぎで準備。徳永、大久保、
加藤の三名は五龍岳の附近に雪洞を掘るべく九
時五十分出発。

松久、家田、久保の三人は雪洞へ残余の荷物
をどりに下る。十時五十分善松の小屋着。雪
洞のため小またに足踏して下り十一時三十分雪
洞着。十二時頃よりみぞれとなる。荷物は全部

もち、スキーは本にくくりつけて登す。もし冬
用のテントをこへ張つて居たならばあの強風
で吹き飛ばされて居たことであろう。十二時三
十分雪洞着。風勢は烈しくなつて来て複界は効
かず、今朝の足跡も大分わからなくなつた中
を登りすぶぬれになつて二時五十分小屋着。火
をこしらえた所へ五龍へ往復した三人が三時三
十分帰着。夕方よりものすごい強風となる。天

井のぬけた所へグラントシートを張り風の吹き
込んで来る隙面に炭酸をつめる等して至温を上
昇させ衣類の乾燥に専念する。

四月六日 風雪 流瀧

四月七日 晴後曇 五龍前進

六時起床。晴天けれどヤン風あり。高空には
巻雲。五日分の用意をなし、九時五分小屋をし
つかりしめて出る。聖荷を背おつての牛首の南
面下りの悪境は険難、大黒あたりはかなりもぐ
る。この頃よりガスが出始めやがて隠れられて
降り出す。明るく雪のうすいことを感じさせ
るが晴れそうでもないが晴れない。二本松ピー
クから大黒嶺山へ下る尾根へ少しはいつたがす
ぐ気がついて御嶽の麓にたか。御嶽の麓に
登部から雪洞地帯へ近づいて尾根の険しくなつて
来るときだ。隊長の方を導いて来てとらう。

本降りとなり風も強くなつて来た。春といふのに一日もまたない天候を皆でうらむ。二時三十分雪洞地帯着、一昨日掘つた分は昨日の雪ですつかりうすめられてゐる。二二の位置は五龍の東峰G1とその東側にある小峰との鞍部の信州側で、槍の殺生や穂高小産から蘆澤へ下りかけた所にあるのと同様な氷河によるものではないかと思われるカールの滑削面を登である。正面にはG1の東壁を見、前は蘆澤を少し平になりそれから白岳澤へ一氣に落ち込んでゐる。雪量は意外に多くて、すぐ岩が出るかと思つたが案に相違してつめれば十人入れる位の大きいので三時頃かかつて掘つたがなお相当あるようであつた。外壁のプロックを積みはじめたのが五時三十分頃、天候はますますく険悪となり風も強くなり、柱状結晶の細い針の様な雪が吹きつけヤツケもズボンもばりくく凍つてゐる。鞍部においてあつた荷物を取りに上ると三時頃の間に全くうづもれてゐた。六時三十分ともかく雪洞と完成、食事をすませ、寝る。

四月八日 ガス 滞在。

明け方寒さに目をさますと夜の間にもプロックの間隙から入つた雪は円錐形に高くつもり、入口のグラントシートを吹き飛ばして飛び込んだ雪

は入口に近い方に積た二人のシニラーフの上には横つて居る。天候をのぞきに行くに攻雪、今日も沈澱と決める。ラヂウユスで昨日ぬれた衣服を乾かさんとしたが蒸気の多いためか成功せずカウリンも怪しいので断念する。今まで十日入つて居て、完全に晴れたのは一日だけ、この調子で悪天候が続くとすると明日も吹雪なれば次の晴天には残念ながら引きかえさなければならぬ。夕方近く凍が痛くなつたり立ち上ると胸がドキ／＼するものが出てきたので一度全換氣の必要を感じて靴をはき入口のグラントシートを取除けに行く、入口を前けると雪はやんでいたので外に出る、霧は流れてゐるが高空は晴れたの空は剣も見えぬ雪の高度は高いが夕焼けで明日は晴天になりそうである。しばらく外にゐると雪洞の中がいかにか暖かいかわかると共に、その空気がいかにガソリンと煉乳の酸敗した臭で充満してゐるかがわかり、あわててピッケルをプロック壁に突き差してベンチレーターを作る。今朝からの積雪に風は途中からやんだので乳が全部ふさがれていたらしい。夜は明日にそなえて七時に寝る。

四月九日 快晴、愛度、鹿島極アタック

四時起床、昨日の見込み通り晴天、炊事をし

ながら入口を通つて見てゐると暗紫色の空に梨瑠の五龍が美しい。七時出発、七時四十五分五龍頂上、前途に時崗をくうことを思へばすばらしい積雪にもゆつくりしてゐるわけには行かぬ。直ちに出発相当もぐる粉雪の斜面を下りクラスト雪をかぶつたカラ處を左へ捲き氣味にGの岩稜に取つてミルトを求めてこれを越える。昨日までの悪天候を一氣に取りかへした策は晴天だが氣温は相当低く着てゐるものは凍結し岩にふれた手袋は凍りついて引離さなければならぬ。G4 G5とどれがどれやらわからぬままに登つたり下つたりして大谷主後縁通りを進む、カクネ聖降り口九時三十分、最上鞍部の附近からしばらく黒部側を大きくトラバースし鹿島北壁を正面に大きく望むピーク(二六二〇米)の守前から再び後縁に戻る。これから二つばかりピッケルを越え急な下降を終つてギレットの麓小屋につく。小屋は壁板全部なく中には雪が大余に積つてゐるがプロックを積み重ねれば雪洞よりは余程役に使用できるであらう。晝食をすませ出発、小屋の南側の急斜面は相当困難、はじめはギイルを使用する。すでに十一時五十分、これからギレットがあるし六人でギイルパーティー二組で行くと非常に時崗をよる故大久保、松

又、久保の三人は引返し、徳永、加藤、飯田の
三名は可能な限り前進することとする。

キレット小舎より麓橋

(登山隊員の手記による)

全隊麓橋登頂をめざす私達六名はキレット小
舎を出発後直ちに小舎割上の登攀に掛つたが約
十数米を登りキレットにステツプ・カツテイング
で登つた所でカクネ里側に張り出した雪庇にフ
ブく比較的軟いオーバーハンクに阻まれた。不
安定な位置のままアロツクを切らずにピツケル
を二本使用して急激にやせた尾根上に出る。「
小ハ」「大ハ」とつづくこの後線上に立つて漸
くこのまゝ全隊麓橋登頂に向う不利を察し、若
千の観察の後やむなく徳永より後続の二名に登
頂断念の旨を伝へた久保先輩にこれと同行して
いた。登頂隊となつた徳永、加藤、飯田の
三名はアンザイレンし露出した岩を足印に一尺
足らずのアレート上を伝ひカクネ里に身を投じ掛
す「小ハ」のギヤツプをぶら下つて降る。こゝ
は音細野の入夫が墜落死亡した所で、夏道はく
さりづたに尾根の下まき奥野の人が昨春使
用してゐるけれどもくさり使用不能である。
このくさが埋もらずに使えると丁度「小ハ」
の端にトラバース出来る。キレット小舎割上の

壁はアイレットに依るよりも黒部割へ草つきを
利用してトラバースするのが正しい。「小ハ」
ギヤツプから少々態度の良くなった尾根上を辿
ると「大ハ」即ちキレットである。稍上向きか
雪庇を五回切つて越え雪庇基部のハイマツを積
りに体互のり出すとやつとキレットの底が見え
た。底の見えなげに下降は危険至極である。晴天
の割に気温は非常に低くしげらくじつと立つて
いても我慢のならない寒気におそわれる。廿五
米の補助サイルでジツヘルシカクネ里を縦面に
のぞきながら二米足らず下つた所で真黒にくん
つたフィツクスのザイルを見付ける、これがぶ
ら下つてゐるのはキレット降路中唯一の頼り得
るハイマツの枝である。日陰になつて冷やつか
な黒部へつづくこのギヤツプのボーデンは西面
を失望的な甘水の岩壁にはさまれ、何處降り險
峻なものという気がする。キレット小舎より
こゝまで急をづくひまもなげだつたが一時雨
近頃の時間を嘆つてゐる。一応このギヤツプの
四十米程下つて見たが取付き点なく、夏道通り
タサリを極り出してトラバースを断念。いさな
り抱けた麓野の山を登つてかわは朝かかな？
朝、頼調を登攀が出来た。登頂に言つて表層
の雪面がくすれ落ちるために、急激に登つて

ゆく後線と比較的忠実に通り、頂上直下を少し
まいて午後二時半北麓ピークに立つ。朝、立山
の西空に黒雲が散り始め、気が付いた私達の頂上
に大きな雲の塊が近づいて北へ流れて来た。風
と兵にかすが時折速くの視界を包み斬つて天気が
崩れ出す。キレット小舎への降路は全く難なく
至極頼調に運んだ。

一方引返す三人は方一前進班がピークする
時の用意に食糧、マツチ、ツエルト等をキレッ
ト小屋に置き往路を引返す。キレット小屋の北
のピークからキレットへ向つて前進する三人を
認めヤツホーをとりかわす。それからしばらく
して元の二六二の米、ピークの附近からふりかえ
つて見た時にはもはや何も見えなすこで、二十分
以上まつたがなお北麓に向う後線には見当の
す引返す道々ふりかえつては否を求めヤツホー
を叫んだが応答はない。天気は相変わらず晴だが
西方立山連峰附近に積雲が出現しこれが午後
ら出た風に乗つて五龍のあたりまで流れて来た。
志村や五龍まで来てかわはつた。頼調はあつて守
心した。前三人は巨波と同様に積雲を三三三三
一時雨後に真淵橋着、共に降りて三三三三三三
りは相変わらずかつた。後をたづねて

(6)

四月十日 快晴 霧松へ。

なるべく持つて帰る荷物も少くするため食糧をどんく食う。十一時四十五分雪洞先、昨日の積雪は消え風も納まつて晴天、雪野は香殺がたながいっている様でありまことに春らしいのどかな天気である。この雪洞の位置は雪量の点荷上げの点よりして誠によい場所であつたと言ふ事が出来る。昨日で残れた足に荷は相違重かつたが帰り道の争として気は軽く来る時はガスにかくれて居た五龍に見送られ立山連峰を五分に眺めつゝ、三時二十分霧松の小屋に着く。不帰復寮をもちかねて霧松丘頂上に出掛ける。この日多敷の雪高を見る。始め八方尾根をまじくしなかな上れなかつた霧松の小屋も今はもういもどに下つた様な気である。

四月十一日 快晴 不帰復寮。

昨日午後から雪の方より松がつかつて来た高層雪をばんやりした高層りだがまだまじくすれそうもない天気。又機会もなだらうから午前中不帰の復寮に行く事とする。九時三十分留野の大久保谷を降りて五人三本灯を通つてそのも一つ北のピークまで行く。十一時小屋に帰る。一時小屋敷八方尾根を二人に下り雪洞の所でスキーと持ち荷物のためのスキーは必ず例年より雪の

消えるのの早い八方尾根を時々降まれば込みながら四時過ぎ霧松小屋着、照葉より谷道を下り六時細野着。

四月十二日 晴

春山食糧報告

冬山の経験を基礎にして、嗜好とカロリーを加味した予定献立表を作製し、出来るだけ余分のものば省くことにした。この為野菜は少くして、ビタミンB・Cの注射を時々行うことにより、体力の低下の防止を行つた。

主食は一日二千五百カロリーを標準とし、米二合、餅一合、乾パン三百瓦を一日分とし六人十日分を準備した。次に食糧の一覽表を善く。

米七升、餅七升、カンパンは小麦粉六貫目、副食は豚肉一貫、乾魚六百瓦、ソーセイジ二百瓦、玉ネギ三貫、ワケメ二束、味噌飯盃一杯、油六合、カレー粉二箱、塩三合、バター半封度、砂糖一入半升、コーヒ若干、アマモロ若干。尚その他個人的に持参の罐詰六個、煉乳五個等。

以上を総計百六十八食で消費し、平均一食七十カロリーで主食副食共不足なく予定の計画を遂行することが出来た。一食平均三十四十

送り帰すものを荷作りし三時四十分発にて帰路につく。

四月十三日

午前帰寮。

八錢で、その中主食費十九円四六錢、副食費十円七二錢かゝつた。(松久)

春山會計報告

出発より帰寮迄全員一纏に行動し、母した費用は左の如くである。

食料	3000	酒類	3000	雑費	300
一人用	500		500		50

餅	300	乾	5070	味噌	630	二合	300
	50		845		105		50

その他	計
500	13100
83	2,183

(松久)

春山に用いられた

計画的ビヴァークとしての雪洞

家田千尋

我々が廿五年度春山に於て建設した二つの雪洞につき、計画にもとずりて考慮されたのは次の諸点である。

一、建設地点の融通性

嶺立山稜線の鹿松岳以前はキレット小屋を用いたが、キレット迄の頗く白岳、大遠見を除くは、フォースドビヴァーク以外の計画的になされた天幕設置に對する記録が、殆ど無いと云つてもよい位である。よつて擧雪期に於ける天幕の設置地については、予備智識が稀薄であると言わねばならない。更に、我々が目ざした麻葛嶺には、一旦大遠見に下るか、或いは白岳に作られたアドヴァンスキャンプからではアプロウナが長すぎる事より、更に前進して少くとも五龍の道下、及び五龍を越えた何う劔に建設しなくてはならぬ。その場合、天幕によるよりも、雪洞に避難する事の方が適当である。

建設地点の差慮により、風に對して抵抗少く

地形にナイーヴな壁及び壁の厚さによる防風は天幕と比較される時救済之に優つてゐる。更に後立に於ては、風は普通急の気圧配置によるならば大体黒部側より信州側に向つものを見做すのが尋常である。この場合建設に對する雪量を考へれば、當然後線よりもこちらかに寄つて後線直下敷氷に置かれると思われ、その場合黒部側を下るよりは信州側を下る方が雪洞の入口を風下に向けることが出来る。幸いな事にこの後線よりの傾斜角は黒部側にゆるく信州側に急勾配である。故に後線上に、又は傾斜のゆるい黒部側に棚を作つて風に曝すよりは、信州側に殆ど棚を作らずに、いさなり覆氷を振る事により前風及び突振時向の短縮がはかれる。

三、重量

天幕の重量もとも云うべきでないが、雪洞の重量は、

軽減が、如何に重大な因素であるかは言を俟たない。

我々はこれにより又一回の荷上げを要しただけで年首を過ぎ、五龍の肩に至る迄、全裝備をもつて約八割以内にとどめ、日教、アルバイト、食糧を軽減し得たのである。

四、設置に要する時間

天幕は約一時間半、雪洞は八人、雪痕、僅造を考慮に入れて約二時間より三時間半と予想された。この場合、天幕に有利であるが我々の計画よりすれば、雪洞設置地迄完全な一日行程ではなく、日没前三時間の余裕は充分に見る事が出来る。

五、撤収

撤収に、天幕よりより簡單である雪洞の有利及び「岳人」に於て剛面發行金の懸念した如く、一旦天候の急変等により逆行を余儀なくされた時、雪洞に滞着し、再度の生活に堪へ得る事は天幕に於てはその比を遥かにし。

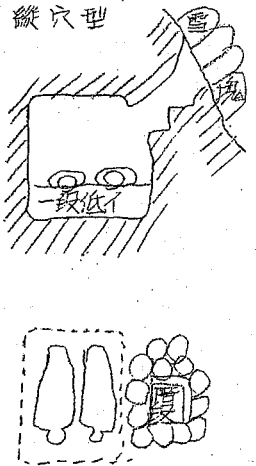
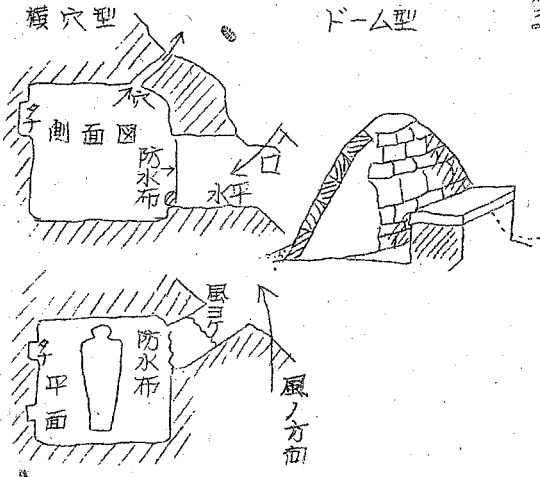
六、居住性

寒度、気温については天幕より劣るとは、雪洞

以上の考慮を以て行われた雪洞生活はその予
想と穴点を擧げながらも之を裏書きし、危惧を
もたれた居住性をも克服し、大適なく計画を終
る事が出来た。

雪洞の建造の一般的概念

「ケルン」57号23頁の「雪洞雑考」によつて、
諏訪多鶴藏氏はスノーホールの型として、ド
ム型、横穴型、縦穴型、雪中型を分類して居ら
れる。現代のイタリイに属するものは大体ド
ム型に、雪洞を横穴、縦穴型に入れて考へて
ゐる。



我々の用いた雪洞について

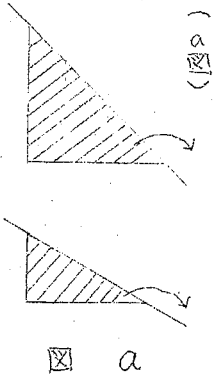
オ一型のイタリイは、廿五年度冬山に於て我
等は、初之を主に中京山岳会の指導により建
設したのであつて、今をば實際に用ひる段階に
達して居ないゆゑ、之をすぐに春山計画中に
算入すべし何等の理由はなかつた。又、雪中型
も当然問題にならず、残る横穴型、縦穴型をと
るべき場合に於て用ひ諏訪多氏の言によれば、
横穴型、傾斜面や堆積してゐる雪に横にホー
ルを作つてゆくので最も多く使用され、理想的
な型であらう。以下畧
縦穴型 平地又は斜面に作るもので横穴も併
用せねばならない。以下畧
オ一にも述べた如く、信州側の急斜面に作るコ
をオ一條件とする我々は、横穴を、それも実付
合算、斜度、暗洞の節約、外界との連絡（一は
主として天候を對象とする）を加味して、要則

的を、又幾らか関西登山会によつて行はれた雪
洞を手ぬて作つて見た。

我々の作つた雪洞は、八方尾根オケルン上の
下樺に於けるものと、五穂G.G.のゴル、通尾ル
ンセ山に於けるものであるが前者は單に荷物の
中継として、便宜的に使用したものであつて、
先に述べた條件を決して満足してゐるものでな
いことは云ふまでもなく、之は略に参考として、
ここに加へる程度にして、後者を重点的に見た
のである。

横穴の利点は作業効率が増大し比しより大なる
る、この場合、雪面の傾斜が取る程度多い程雪
利であると言へよう、と言ふのは極りくずと成
た雪片の処理が非常に早く簡單に行はれると共
に縦穴に比し、自然凍くなる天井は傾斜度の増
大によつておびなされる。

我々の行つた発掘を逐次的にのべると、先づ
傾斜面に棚を作るコより始る、この場合も傾斜
の強い方がかまかずとされる雪片は少なくてすむ。



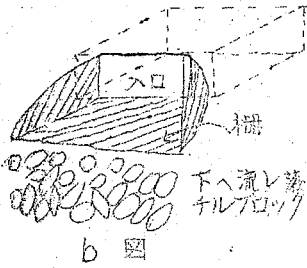


図 a

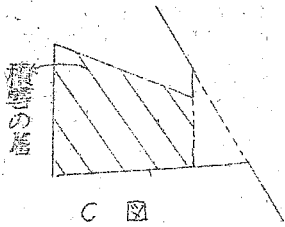
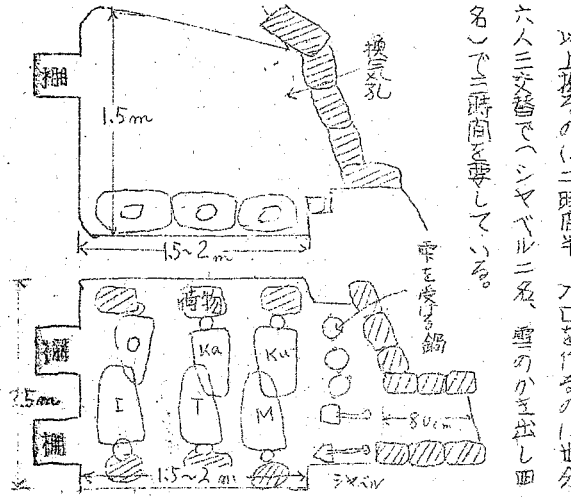


図 b

又、雪を下に落し流すのに都合がよい、之がす
もと二人が並んでそのまゝ奥に向つて横にホー
ルを掘つて行くが、この場合、入口を考慮に入
れずにそのまゝ高さ約一米強、横幅二米弱のま
ゝ掘り下げて行く、奥に入つて行くことにより先
に作つた掘り手箱が出来ると、そこへグラウンド
シートをひき、前面及び上面のかまどつた雪を
その上におとし、他の二人が之を引まくり出し
て掘り外に投げ捨すのであるがこの場合も先
に作つた掘り手箱の小さい方が引まくり出すアル
バイトも少なくて済み、又、外に落す雪片が掘の
内側に堆積するコトなく、全部下へ流れ落ちる
之をくり返すコトによつて、斜面の積雪に大まか
な矩形の穴が出来るとであるが、この場合、シ
ヤバルをもつ二人が奥に收斂人員に応じて両側
をかりまき、そして奥行が入口より約二米位で
大体の格好がついたコトになる。(ト) 図)

天井は大体内側の壁についてある積雪の層に
沿ひ幾分乏よりは傾斜をゆるくしてけづつた、
即ち奥程高く入口が低い片盛根である。(C) 図
えは別に大した意味はないが左右両側及び
奥に物を置き、又人が位置するたために、天井
のしづくを一侧に集めんとしたのである、か
ように作られた天井が平面及びドーム型に作
られた天井に比しそれ以上泥下したとほ思へ
なかつたし、雨にも充分耐え得た。
さて、床及び入口であるが、先に入口を考
慮せずに、只作業の効率を増すために大まか
とつたこの入口を、半ばイグルー式にアロッ
クで以てふさいだ。即ち作業員の足によつて
充分踏み固められた床に、ノコギリ、シヤバ
ルによつて長さ四寸乃至五寸程、隙、塵を、
共に納せ五等位の矩形のアロツクを切り之を
出入口とする一側を破して、殆んど全部をア
ロツクの隙積によりおほひ、奥にこの作られ
た壁と无の大まな入口のひししとの間に積
んで天井もかさぐのである。(d) 図)又、残
した入口は掘り手箱をハナ打位の之もアロツ
クの隙積によるトンネルとなし出入口を作つ
た。(E) 図)



なり中で立てる程度であつた、アロツクは完全
な矩形にはならないので積んだ時、多くのすま
まを生じたが内外より小さい雪片を孔に押しあ
まをさふさいだ、一部けそのまゝ残して、換
気孔に利用した。
以上掘るのに二時間半、入口を作るのに廿分
六人三人替で(シヤバル二名、雪のかま出し四
名)で二時間を要してゐる。

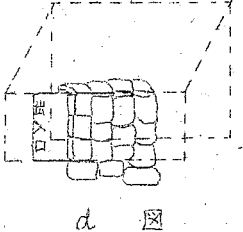


図 d

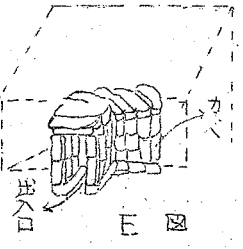


図 e

ハ方層根下中に中継として作つたのは規模は之に似てゝ小型、天井入口も同概念で、収容人員四名であつたが之は高度低いため雨を受ける率が多く、天井も薄かつたが充分使用に堪へ得た、又種を利用して下敷とした、ゆゑ冷風も濡れる事はなかつた。

適量として携行したものはシヤベル三、二、大一、軍隊用中型三、二、ノコギリ二、であつたがシヤベルの中型二は作業の初期に柄のつけ根の鉄の部分が折れたので實際は二柄を用ひた事になる、春雪にはシヤベルは重電がなければ効果は薄く、柄は思はれる、又柄も相当長くて丈夫なのが望ましい、取手のついた柄でガマかせに雪面にぶつつけるのは非常に能率が良かった、

而し雪が固つたために無理にこかると柄のつけ根から折れる危険性が大である、大型シヤベルの方が効率が良く、並んで掘つてゐる二人が時々左右シヤベルを交換しないと一方はかり深々掘れる様な状態であり型の揃つたシヤベルの方がよいと思はれた、之がため現存市販の火りのある大型シヤベルが先張り適してゐるのではなからうか、之はもつとも柄と分取出来ないうらみがあるが、ノコギリは天刃で雪らスロックを切るのに用ひられたが、柄が凍りついて丸い団子

が出来たので扱ひ難い。

堅洞生活

温度

外界の気温に最悪される事大であるが、この春山は後立殺線でも雨にやられた程で相当暖かつた、室温は大体内中暖房具を用ひずして二度位であつた、炊事時はラヂウス二柄を用ひて約八度である、此の熊鷹松の小金の室内温度今朝に零下十度であつた事に比し、亦いぶん暖かであり、冬とは問題にならぬ程気温にめぐまれてゐる、夜中でも寒冷のために目を醒ます事は殆んどなく、そのため夜中の気温をほかり得なかつたうらみもある。

湿度

先張り相当高いと思へる、生活した西日の間に体にこたえる程の湿度のものではなかつたし、むやみに物がしめると云ふ事はなかつた、濡れるのは皆と云つてよい程床に原因するものであつた、又炊事の時、気流の上昇と炊事物の湯気のために入口から約二米の奥が日中でも白くかすんで見えなかつた事があつた、濡物の乾燥には消極的な方法しかとれず、体温に頼つた。

換気

堅洞が余り埋まらなかつたし、入口が外界によく接触してゐるので夜中でも窒息の危険性はなかつたが、炊事に用ひたガソリンのガスが充滿する事があつたが強風の時自然に堅洞内の換気がよくなるし、入口が明けられる場合もなかつたので以前は天幕内でよくやつた呼吸も、こでは一度も見られなかつた、換気孔は入口の壁のスロックに小さな孔をあけた程度である。

風

大体風下にあつたので、よく之を防ぎ得たが壁がうすいのと入口が大きく、入口と壁との隙が短いためによく外の音が聞えてゐた。

雨

雨による天井の滲下と壁の滲下を恐れてゐたが、心配した程でもなく充分に堪へる事が出来た、滲下をほかる事は出来なかつたが自測でもさう大したものではない様に思へた、而しハチ尾根のは天井がうすく、よく雨があたるので天井が青くすいて見えて来て明るくは申し分なかつたが信頼性はもてなかつた、気流上昇と雨による奥は天井の構造入口の一侧にししか落ちないので、之をコツヘル、飯盒でうける事により、充分炊事に供し得、殆ど雪をどかす必要はなかつた、燃料を節約する事が出来た。

外家との接触

又の頃でも云つた様に室内と外家との距離が非常に近く、それがため室温の低下、又の吹きこみと云ふ欠点があるが豫気、及び外家の家象條件を變なぐらにして之を知るといふ利点があつた。即ち凡の音に依り、又少しの隙間より入る吹雪も外取の状況を知り得た。

炊事

炊事は天井からおちる塵を用ひる事によつて行はれた。之も後には段々ラヂウスのガソリンの蒸気が混ひて降着下する事により臭く存つて来たがそれでも充分用ひる事が出来たし、燃料節約の爲進んで之を行つた。日中はひつエリなしに落ちるが夜中は少く、朝にはゴツヘル内に凍氷が張る程間欠的であつた。なほ水は夜中におちて来るものの方が美味であるのはやはり体感によつてとけた事によるのでありうが天井に煤がついてゐるので余り大差はない、又水を用ひる事によつて、炊事時間の短縮及び米が短時間で蒸ころ等の利点があつた。

- (1) なほラヂウスは三回あつたか、之を全部同時に使用する事はガスのを病、ひいては中毒の危険性があり、二回同時に用ひるのをマキシマム

とした、炊事は換氣を考慮して入口の横を行つた。

その他

オーバーシニアは大部分用ひなかつたが用ひた方が有利であり下からぬれるのを防ぎ、狭い雪洞内で夜中体を半分雪の壁におさへつけられても充分睡眠がとれる、下敷はグラントシート二枚を二重に床一杯に広げ、その上にカネツク五枚を用ひた。

入口はグラントシート一枚を垂らし、ピンケルで押えた、濡物は乾かき袋靴下に限られたが雪洞建設中にぬらしたスポン、上着も体温に依り一晩で乾かし得た、全員が手袋靴下を着用し、又シユラーフ内に入れて乾した。濡場に対する危険を有さぬ程暖かであつた、而し一巻のみアマツクに用ひた靴が寒かつたために一日中足をしめつけたのに及ばずこれその靴指を濡場

五月の槍より燕へ

新制部員 田島汎

新制の學生が試験の告春山シーズンを通じてその理合せといつた意味で五月始め連休を利用して何かやらうといふ事は可成早くから決つてみたがそれが機中合宿から益々それを一歩のぼして槍、燕の筆走と決つたのはもう言敷も

に犯された、

さて、之で我々がこの春山に於て用ひた雪洞について大よそを述べたのであるが、我々もこの雪洞に得た以上のなほ氣づかぬ幾多の欠点を包含してゐる事と気が、

只今迄天幕と設備場所のコンピネーションや、雪洞内の生活等あらゆる研究がなされた如く、雪洞についてその問題は同様に取り上げられ更に雪洞そのものの砂態、雪質、雪量に対する考慮、氣流、湿度、降雨の問題、天井況下、揺動法、居住性、裝備等は我々々の研究し、経験しなければならぬ幾多の問題がある、之等の諸問題をお互に一つづつ解決して行く事によつて、物量にめぐまれぬ我々が積雪期に於いて、取るべきルートは幸ひにも此処からでも一歩一歩前に行得るのではなからうか。

終つてからだつた、ウーダーに家田克を加へて計六名、会計四名、食糧川島、田島、裝備小沢、記録二本、各、擔任したがつて忙しい準備の數日の後我々は廿八日の夜藤田先生始め諸輩友人に送られて大取駅を出発した。

廿一日 四月廿九日(土)晴

津中余り眠れぬまんにこの、二の志川着 田舎とも思へぬ優秀なバスで龍澤へ、船津は小さな登山船 船の全周差類の船中を生すと、いかにもバスにゆらゆらと揺る(一六〇〇)梅尾迄行くが道路損傷の均下通、仕方なくトレーニントとばかり歩き出す、焼を正面に歩くこと二時間にて杖尾を過ぎ神坂に着く、神田の方にて米、野菜を購入の上蒲田へ薄曇の空に穂穂高連峯が遠く早くも胸を躍らす、美しい、雄大な、一カ時蒲田着、その夜は壁の上にマントンでグツグツと寝る。

第三日 四月廿日(日)晴後時雨

六時起床七時出発、美しい残雪の稜線を前に足音が足下の蒲田川に流れてくぐぐと進み予定の如く道はほかどおり九時頃には既に二俣(新穂高湯釜跡)を過ぎて山懐深く進入してゐた。左手に白銀色の美しい空ヶ岳、物薄の岩場の錫杖をみる、穂高連峯は右手に蒼々しく益壯重にその威容を遺憾なく我々に示す、そのすばらしい白い稜線が雲空に透べスカイラインは類の印象的である、やがてボツ／＼残雪が見え出し行く程に雲が重なる、新田川は木に生じた霧と重なる、流れてゐる、白出谷も何の門もなく過る。

がその周辺から残雪が甚多くなり夏道も雪におほけられて来る、沢といふ沢には大依テマリが出てゐる、途中で一頭の鹿をみる、も皮は手だ白い彼の身軽さが皆の羨望の的となる、

十一時四十分 蒲谷のケシ手坊で河原へ降りて乾パンと紅茶で朝食を攝る、日はボカ／＼と霞く雪山は美しく我々の屈曲を囲む、雨ささのけ水の音のみ、山の響いこみ／＼感ずる、滝谷の大きいテマリを越えるともう谷は一面の雪である、輪カンをさげすつと各傳ひに行くと坂谷の中が狭くなり南側のカンの林が垣り遂に極めて細い谷間に至る、ええ坂けうとここが穂高だった、小屋は右手カンバの林の中にあつた、ズギーにはさぞよからうと思はれる、快適な雪の原、その中にある檜平小屋は暖かい、小屋だった、薪もあり雪は深かつてゐた、夏に快適 お腹でこの夜もゆつくりレ帳のシニラーフの中で眠ることが出来た。

又三日 五月一日(日)晴後雪

お一日穂高で朝食を、六時五十分小屋を出て一踏沢をつめる、日は未だ中岳にかくれ雪は快くクラストして靴の下にサク／＼といふ音が、気が持てる、急な急な天候は全く恢復、朝靄の空が美しい、八時半までは回り右へ廻り込んで稜線、稜線を登る、至るまでアツ／＼と、しがその後稜

稜線越えが物凄く急斜面加ふるに山へ入つて二日目まだ調子が出ないか一般にコンディションは低調で案外時間を食つて飛弾乗越着十一時、すぐに肩の小屋に至つて朝食、さすが名に負ふ穂高の稜線、物薄い雪庇、その他悪い状態が手にとる如く見える、北アの盟主、穂の穂丸、それには実に雄大そのもの、小楯をしたがへて威圧的に我々を見下す、こゝは北アルプスの中心なのだ。

アルプス気分を満喫した朝食の終、先程迄倦怠の肩にあつた雪が忽ち空一杯に広がる、其にガスが舞ひ上りアツ／＼と、小間に何も見えなくなつて了ふ、そしてやがて雪が降り出した、仕方なく我々は此日は肩の小屋に安堵を法したので、一時、時既に暮り、山の天候は完全に崩れて了つていた。

辛く比取も又委任性は満点、雪は入つて居らず新もめり又我々は快適な山小屋の第一夜を望むことが出来たのだ。

第四日 五月三日(火)晴

出発前に空気で靴の履かへど出かける、三一八〇米の頂上の眺望又格別、ドツシリとした常念のヒニミッド鏡い穂高の稜線、印象的は富士と白峯三山の音くらへ白く白山、其他刻々立山

それから所謂後五連筆、實に三六の度の暴風、
みとれる一瞥し、やがて下つて愈々東御所
かゝる、大して悪いといふ状態ではな
がもうい岩とくさつた雪にや、難炭、
しかしたくなく先づ難所にぶつか
る、俗に衆議の

志と呼ばれるあたりである、やせ尾根が急角度
でコルまで下つて更に次のピークへと続いてお
る、ラッセルは大伴旅まで、アンガイレンして
順路に、を通過して次のピークに上つた、ス
テツとを切つた岩に落つた雪が表層雪崩とよ
んでゐるのに膝を冷しはしたがこのピークで重
倉しかし寒、いので晝食後はすぐ出巻、それから
後も同じ旅所の連続だつた、尾根はなせてい
るとして明にどちらとも不定に、急に角切れてお
る角度のきつ、方に雪崩底及至その旅路があり一
つまぢがいかいみぢく、せめてなほ一方は縁線
下は人の救米から十数米の所に割目があり雪崩
の危険を恐む、一步も忍せにせず慎重に通過、
天井沢法のコルについて直に西岳の登りにカ
る、夏道に下らず直道に正面のカンバの林の中
を登る、今夜は危険はないが登りだ、輪大舟
にみ登る、漸く十八時半、西岳について登り
た、便所まで登りて小倉は持たなくなつた、神
戸まで登るものと登りて雪崩が一つある、早

日も暮れか、り仕方なく我々はその雪道を修理
してその中へ入つた、幸い尺も吹かず寒外暖か
で雪の穴から月を見て双流にびたりながらシ
ニフにもぐり込んだ。

五月五日、五月三日(水) 晝後

我々はとうやう燃えて、明には元氣を回復して
勇躍、最後の行程無山莊への出発準備にトリ
かつた、一かし川島のみはシニフの性根の
悪かつた岩があまり腹いなかつた林で之が恐らく
彼のへバツタ最大の原因であつたのだらう。そ
れほどに前この日は朝からあまりいい天気では
なく朝晩のやうにもなり一時薄日が照りけした
ものの槍の附近に帯にガスが巻いてつたのだつ
た、七時半出発、赤岩を通過し、一月坊神戸
大学の八巻、諏訪両巻を雪崩と共に二の俣台へ
登つた地点へと差かつた、西側は切り株二の
俣側は大して急ではなかりが積雪下敷米の所にフ
レバス林のものあり、いかにも雪崩の起り相な
所、大車をとつてアンガイとしたるに思はぬ
時間を食ひ、大夫井より三つめのピークで既に
十一時となり晝食をとつた、その頃から天候は
急遽に下り坂に白ひ雲、何も見えなくなつたと
思ふともう雨が降るやうに降つて来た、かくて
雪崩の起るやうに降り下る必きに神戸大の

雪跡があつた、グラントシーツ一枚のみを收
容し他は名を控へるだけにして括を巻く、雨は
益々烈くなつて来る所にマツケも餌も途には
通り大夫井にかゝる頃には全身體までビシシ
川に落ち

大夫井は大きな山である、所々に出てゐる雪
道を目前に雪跡をトラウマースしてつたがその
雪跡が大急傾斜を持ち鋭つもく、荷を壊して
ある、次から次へとトラウマースにつくトラ
ース、この間一巻尾根を周遊して西止にのび
る尾根を降りかけたがすぐに気がついて引返す
それとこの氷で時間を食つて切通は十六時三
十分それから夏道を猛烈にとほつたがその頃
に疲勞の色が全身にみえて来てつた、一体この
辺りの積雪は東面は物凄く雪だが西面は殆ど雪
が積んで夏道が出てゐる、しかし夏道、東面を
廻つてゐる所ではラッセル山道松こぞかぢら
かを選ばねばならぬ、それも皆疲勞に拍車をか
けたのだらう、雨どい事も精神の方面影響した
か、家内リーターはまだ比較的元氣のあつた
私に二人で先に小屋迄行つて後で廻りに来る可
き提案、可成セツケを上げたが余りにも枯れ盡
いのでテロ口岩にて行つてつた、雨は降りて
来た、雨はたまにもしやの予報が私の顔をか

すめた、やがて四宮と二本がやつて来た、家田

リーターは私と二人を残して最後に逃れてゐる
二人の出現へに出で行った、犀旦の林に立った

岩陰に行んで三人は寒く冷さに凍へた、四宮ら
は相違無方してゐるらしかつたし、私どもも始
めての所ではあるし暗くもなつては行く自信は
なかつた、僅々歩いて一時間もかゝらなうであ
らうが暗い中を小沢がやつて来た、小沢も自信
はない林だつた、遂にピウイクに決した、この

雨の中で、それは寒さは等しい正に辛うしいだつ
た、身動き一つするのもしやだつた、田島、河
辺、川沢起まつてゐる、曰木は互に「こんな」を
いひながらうつらくして朝を待った、猶この
日、家田リーターと川島は一つ雨のピウイクで

エルトをがぶつてを張ビウイクしたのだつた、
オ六日 五月四日(木)雨

慈悲な一夜は段々と明けていった、首都を小
川の林に雨水が流れるもうレニチャーフも何もかも
スクスクに濡れてゐた、動くもなやが身にしみ
る、このまま動かすにいたし林な気持もする

しかし、明かるくなり四週が戻る林にならると
誰かぞとぞ、さあさあはばはばを始めた、雨は夜
然として降つてゐる、たゞ視界が僅にきく林に
なつた天、何もかもが濡れしよぼたれてゐるの

で荷は重だ旅だつたがさう苦痛でもなかつた、

我々はたゞ小屋と暖い火のみ求めてゐたのだつ
た、五時五十分苦痛の地を後にして燕山荘に向

か、途中は何の「も」もない道だが案外手回どろ
ろ、大へ行く者の蹠踏たる足敷をみて何か心細くな
る、それでも、六時四十分無門燕山荘に着き得
た、その赤屋根の見えた時の何と嬉しかった丁

度、小屋の中で待望の火にあつて一体の後、
私と二本とで後続のものを出迎へに出発する、懸
念された川島は、小屋とゲート口の岩の中間辺のと
ある坂の下でへた張つた林に坐つて居た、私と

二本が互に支へてやつとの思ひで燕山荘につ
く位、恐らく睡眠不足と極度の疲労からであら
うが、燕山荘に着くや否やへた張つてやつた、
稍く小屋に落ちついて、ホツといた我々はその
日一日またしく中に過してしまつた、

夜に入つて名古屋山岳会と松本工高のニパー
ティーが登つて来て成かに小屋は賑やかになつ
た、小屋の中央の山仲間との集ひ、暖い火を囲ん
だ、それらは昨夜の「を」思へば將に天国であつた

た、夜にレニチャーフが来た話かな、いのでアンペラ
で殿に所が寒くてく「張ろ」が出来なかつた、
と云が至に「手」ではあつたが、

また雨は降り続く、食糧もある「故、雨を衝

いて下りずに悠々待滞、家田兄と二本がピウア
ーク地に残して来たもの(川島のリュック)を

取りに行つた、以外に誰も一歩も小屋の外へ出ず
に過ぎ、食糧に特殊の手筈をこらうたりして遠
慮を防ぐ、その中四宮のお好遊は秀逸であつた、
夕方になつて稍く雨がやんだ燕の頂王がまじい
にみえる、そしてそのバックにアーベンレポート

が美しい、明日は晴、下山といふので早速に
うやく乾いたレニチャーフにもぐり込ませ、
オ八日 五月六日(土)晴

予想された通りよい天気、荷物を纏め小屋を
清掃して九時に小屋を出発、振返つて其の日の
峰に別れを一つ一日散に下る、下りは向の「も」
ないたゞどんく下るだけ、途中宿々林道を誤
り返しながらそれでも事前に「中」房海原着、釜と

水で炊いた蕎麦に舌鼓をうち温泉は「漬」つてゐる
ともうピウアークの一夜なんが忘れた林、
四宮、小沢私の三人が左巻としてその日の中に
帰る「と」なり、こゝでパーティーは解散、全計画
を終了したのであつた、

今次の山行、それは雨にも降られたしピウア
ークといふ破目にもなれり随分と苦しい目にも遭
つたがそれ天に良、経路にもなつたと思ふ、時

オ七日 五月五日(金)雨

に何故苦慮に立ったか、苦慮をこけるには出来なかつたか？ 今次どんな点が成りしたかと思ふ小柄な点を説明する時裏に明日への前進が現れ出るのではなからうかと思はれる、最後に、我々に先立つて一月我々と同トコースに於て雪崩の犠牲となられた神戸大学の八巻餘村両君の冥福を祈りつゝ筆を揃えた。

新制春山時間記録

四月二十八日(金)

二時三十分 大隈発
四月二十九日(土)

四時一十分 岐阜着

五時二〇〇 発

一〇時二〇〇 古川着

一一時〇五〇 発

一二時四〇〇 船津着

一四時〇〇〇 発

一六時〇〇〇 笠谷

一八時〇〇〇 神坂着

一八時四〇〇 発

一九時〇〇〇 蒲田着

二二時〇〇〇 就寝

五月三日 四月三十日(日)

六時〇〇分 起床

七時〇〇〇 出 発

八時一〇〇 三保出合着
(新穂田温泉跡)

八時二〇〇 発

九時三〇〇 柳谷着

一〇時〇〇〇 発

一〇時五〇〇 白出沢

一一時四〇〇 晝食

一二時二〇〇 滝谷出合

一二時四〇〇 橋平小屋着

一五時一〇〇 就寝

二〇時〇〇〇 就寝

五月一日(月)

五時三〇分 起床

六時五〇〇 出 発

八時二〇〇 小休止

八時三〇〇 就寝

一一時〇〇〇 就寝

一一時一〇〇 就寝

一一時三〇〇 肩小屋着

一九時〇〇〇 就寝

五月二日(火)

六時〇〇分 起床

七時四〇分 小屋発

八時三〇分 就寝

九時三〇〇 肩小屋着

一〇時〇〇〇 発

一一時三〇〇 就寝

一三時〇〇〇 就寝

一八時三〇〇 就寝

二二時三〇〇 就寝

五月三日(水)

五時三〇分 起床

七時三〇〇 出 発

九時〇〇〇 赤石頂上

一一時三〇〇 就寝

一二時三〇〇 就寝

一六時三〇〇 切通岩

一八時三〇〇 ゲー口岩

一九時〇〇〇 家田引返

二〇時〇〇〇 小沢着 就寝

五月四日(木)

五時三〇分 起床

五時五〇〇 出 発

六時四〇〇 燕山荘着

九時三〇〇 後続燕山荘着

五月五日(金)

九時一〇分 燕山荘着

〔大井井予前の子ア
(晝食)〕

一〇時一五分 燕山莊着(家田三木)

一二時〇〇分 中野着

又八日 五月六日(土)

一六時〇〇分 宇野着(西宮小次田島)

五時三〇分 起床

一九時五〇分 安曇野分駐署

九時〇〇分 出発

一九五〇年度夏山計画

昨年度我々は剣において岩登りを中心とした合宿を行つたのであるが、本年は春山の偵察を兼ねて重点をむしろ縦走におき、七月下旬大段辛出発し、左部の如く剣に集り数日岩登りをした後、平の小屋で三隊に分れる予定である。

- (K) 富山ーバンバ岳ー池の谷又は白狄川ー三の森ー真砂沢露岩地
- (H) 宇奈月ーアム原ー仙人岩ー池の平ー真力
- (G) 天霧露岩地
- (F) 剣ヶ立山ー五色ー平

平にて次の三隊に分れる

- (B) 平ー南沢ー高幡子ー黒岳往復ー雪の平ー穂高ー上高地

一 奥部上流ー薬師天ー薬師往復ー有等ー富山

- (I) 平ー針之木ー鹿島橋ー五滝ー白馬ー細野
- 期間は何れも半ヶ月間程度である。
- 参加者は現役論十六名の他、大久保 伊藤 西光華が五名より参加出来る予定で、(C)隊は新制部員の五六名となる様である。
- 尚先華諸兄の御参加を歓迎致しますから、至急御連絡下さい。

廿四年度ノート

◆ヒマラヤ遠征隊ー何れも計畫実施中止計畫変更

ノルマエー *Totoko Miao 7700* (シンパ)

フツニユ(六名(確定))

フランス *Diamberg 8172* (スハール) 六名(確定)

アメリカ *Manala Devi 7817* (クマク) ニヨミヤ(オニ登) 四名(確定)

スイス *Kangchenjunga* 北峰 五名(〃)

オランダ *Schiller Peak* (〃) ◆廿四年度冬季各校計畫概要

立教 槍ヶ岳尾根ポーター(成功) 山三月号

法政 〃 〃 (〃) 〃

明治 明神奥校ー奥穂ポーター(成功) 山三月号

慈恵 カマイエラウギカン、ポーター(成功) 山四月号

山四月号

立教高校 鹿島橋尾根(成功) 記録なし

魚澤高校 剣ヶ立尾根(失敗) 山三月号

鈴鹿高校 明神殿南峰東登(失敗) 山四月号

阪大 白馬尾根(成功) 岳山三四号二三号

時報No1

(中京山岳会 白馬尾根(成功) 岳山三四号

二三号)

(関西登山会 栗鏡尾根縦走(失敗)

(登壇後流会、槍北録見報(成功)山三月号)

春山討論會(他種書)

慶応 北岳一聖談定(成功)

山一六月号

筆留 前穂商北尾根一北穂商一(成功)

山五月号 岳区三六号

立致 刺置月小念尾根(成功)岳区三六号

神大 無種不(成功)

京大 五種又五種根一拘子尾根(成功)

廣登 柳池一本師岳往復

南大 八才一五種往復

日比谷高板 拘子尾根(山一月号)

政大 八才より鹿島往復(時報No.2)

政大 種平より鹿島往復()

豊鞋 死亡分のみ

前云學校(人員) 日 日 湯 川

魚津高板(一名) 一二月二八日 宇奈月附近

(備考) 湯心職マヒ、山三月号五百五号

神戸大学(三名) 四月三日 西岳、赤岩間

(備考) 二保谷春層雪朝山五月号

慶応大学(一名) 四月六日 荒川岳小岳後

(17)

(備考) 徒歩事故 山一月号

集

会

記

録

十二月廿二日一月六日 白民主義會聯合會

一月十三日 議題一本月廿七日に報告会(不出)

開催の件を決定、案内状は廿二日に

發送する(時報外)を發行

一月廿七日 春山討論會の實施のための籌備會の新

設を決定、赤尾先輩(工學部、京大)

大山岳部OB)より、白嶺山、冠帽峰

遠征時の準備について、お話し願へ

一月廿七日 冬山報告會、午後五時醫學部記念

館二階にて開催、日本山岳会より諏

訪田、太田、窪田、西岡等の各氏、

先輩吉見、橋本、伊藤、大久保の各

氏出席、山岳会、冬山を中心とし批判

を預く。

二月三日 春期の後立談定を議題に討論あり

二月十日 太田、諏訪田(JAC)両氏より

雪崩のお話を、又、京極先輩(心化

に皮の耐熱度のお話を聞く、田邊尚

山岳部の本利先生、松平先輩(工学

三月十六日 新、旧制大学の休戦會、選りあつた

め後立談定討論を白紙に選りあつた

二月下旬、三月上旬に互り退出

準備小集會を閉く。

三月十三日 水野祥太郎先輩送別會

近く函館運鹽指荷により、(1)ハ

由渡史の水野祥太郎先輩(中込)

送別の會をJACと共催、政大

慶應用不(化)にて閉く、出席者

幹部OB(國里、岡崎、櫻地、新谷)

大久保、他にJAC(櫻原秀吉)等

役全員。

三月十七日 大久保先輩(ギニ外科)より現傷

の話あり、春山討論會編の結果、新

制は五月上旬の約一週間種平より燕

へ、旧制は八才より鹿島往復と決定。

三月廿七日(四月十二日)春山(旧制)

三月十四日 春山報告

四月十五日 道場百文名、家田、由井沢、山平

久保、小沢、三木、田島、田宮川

鳥。

四月廿一日 新制橋一燕計画にリターナルとして

家田を決定、神戸大学燕橋本一ラ遭

難に對し本会より賜舞金四百円を送

付

四月廿八日()五月七日 春山(新制)

五月五日()五月七日、比良全盛走 山下

五月十二日 夏山計画のため劍一平小屋(橋)

後立)を中心にして討論する、佐行(丁)

A.C.)出席

五月十四日 道場ゆき、徳永、小沢、向井、今

五月廿六日 篠田先生 "Quite Roy: The

"Waterborn" の紹介

夏山計畫季報

六月九日 六甲ゆき、大久保、伊藤先輩、

六月十六日 諏訪田氏曰ママの禱詞講演、本

田(丁A.C.)赤尾面氏出席。

六月十七日 新制歡迎キヤムス、十一名 家田

廿日 大島、多喜野、田島、川島、宮本、

近、山本、岡田、内田、大久保先輩